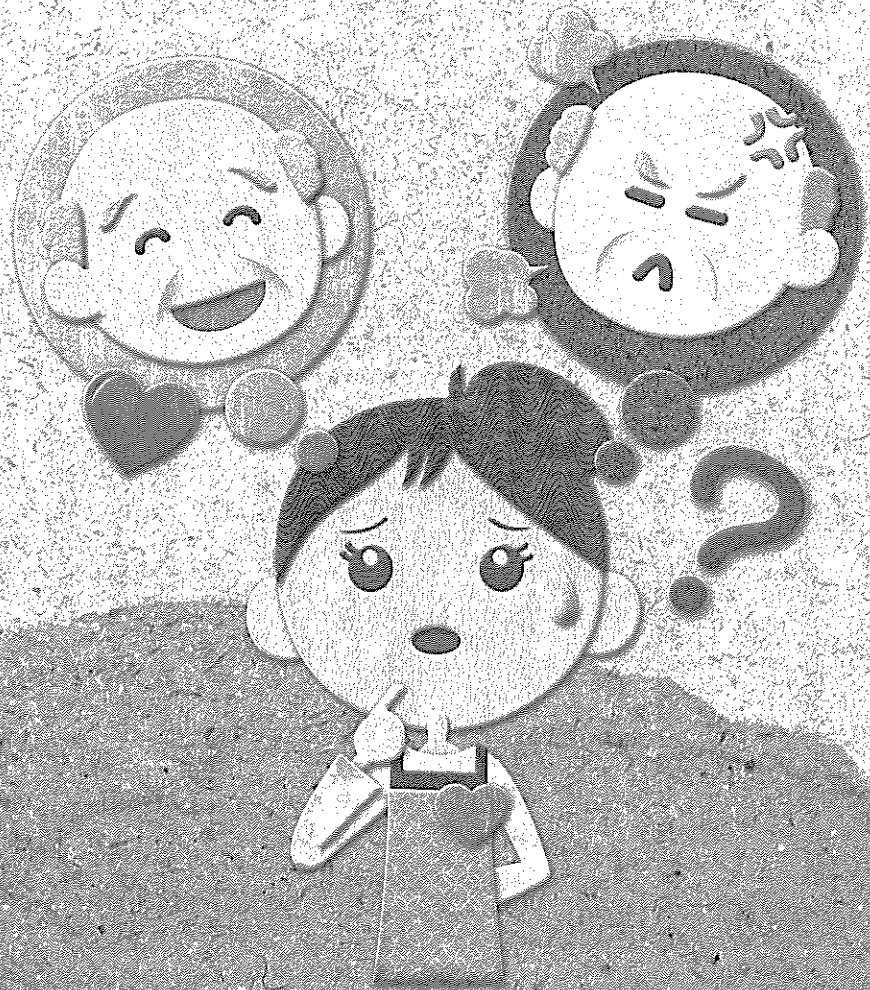


「勇気」と「実行」の間

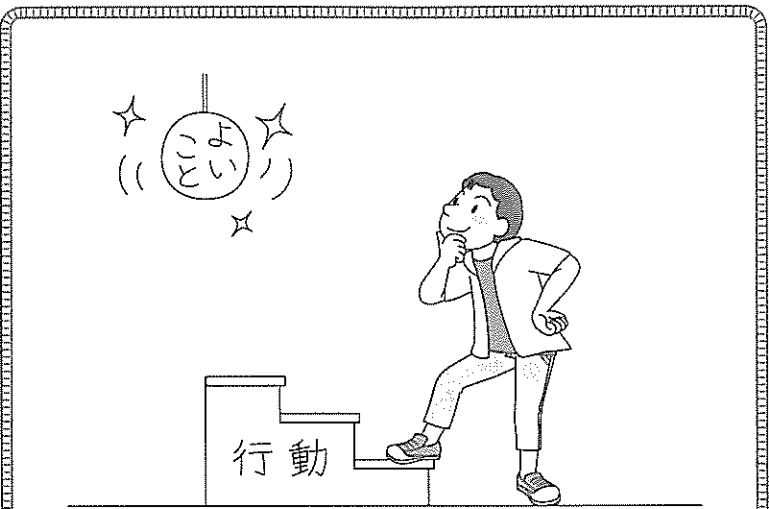


NEW MORALS

私たちは、
毎日のような心で暮らし、
どのような心で
人に接しているでしょうか。
ニューモラルは、
人としての行いととも
そのもととなる
心のあり方（心づかい考え方）を
大切にするモラルです。

この小さな月刊誌
『ニューモラル』は、
創刊（昭和四十四年九月）以来、
心豊かな人生、楽しい家庭、
明るい職場、住みよい社会を
つくるための心づかいと行いの
あり方を提唱しています。

目次	「勇気」と「実行」の間.....	3
	心づかいQ&A.....	16
	あなたからのおたより.....	18
	「モラロジー生涯学習セミナー」8月のご案内.....	20



私たちの日常では、「よいこと」と分かっていても、それを実行に移すことができない場面があるものです。例えば、街で困っている人を見かけたとき、知らない人に声をかける気恥ずかしさや、手助けを申し出て、断られたらどうしようという不安、あるいは、自分が声をかけなくても、ほかの誰かが助けるだろう、と人任せにする気持ち、が先に立って、一歩を踏み出せないこともあるのではないのでしょうか。

今月は「道徳実行の勇氣」と「実際の行動へのステップ」について考えます。

さわやかなふるまい

初夏の日曜日、大学二年生の光太郎さん（19歳）が、サッカー部の仲間である優介さん（19歳）と一緒に買い物に出かけたときのことです。

目的地へと向かう電車の中は、休日ということもあり、やや混雑しています。しかし途中の駅で大勢の人が降りると、目の前の座席が空いたため、二人はそこに並んで座り、最近の部活のことなどについて語り合っていました。

ある駅で停車したとき、光太郎さんが

座っている席より少し離れたところにあるドアから、杖をついた高齢の女性が乗り込んでくるのが見えました。すると隣に座っていた優介さんが、さっと立ち上がってその女性に歩み寄り、声をかけたのです。

「よかつたら、あちらに座ってください」「まあ、ご親切に。どうもありがとうございます」

優介さんに案内された女性は、笑顔で席に着きました。心なしか、車内の雰囲気まで温かく、やわらかいものになった

ようです。

光太郎さんは、優介さんの自然でさわやかなふるまいに感心しました。一方で

は、お年寄りが乗車してきたことに気づいていながら、優介さんのように動けなかった自分に引け目も感じていました。



断られる不安

光太郎さんが行動を起こすことをためらったのは、理由がありました。

以前、通学中の車内で見かけた高齢の男性に席を譲ろうとしたところ、相手が急に不機嫌そうな表情になり、語気も荒く断られた経験があったのです。光太郎さんとしては善意から、勇気を振り絞って声をかけたにもかかわらず……。それ以来、光太郎さんは同じような場面に居合わせても「また断られるかも……」という不安が胸をかすめるようになり、一

歩を踏み出すことができなくなっていたのでした。

*

その日、二人で面白い物を楽しんだ後、再び電車に乗ると、光太郎さんは行きがけの出来事を思い出して、優介さんに尋ねてみました。

「今日、行きの電車でおばあさんに席を譲っていたけど、どうしてあんなふうにならに動けたの？」

「実は最近、ようやく思い切つてできるようになったんだよ」

優介さんは、少し照れくさそうな表情になりながらも、こんな話をしてくれました。

「ありがとう」のひびき

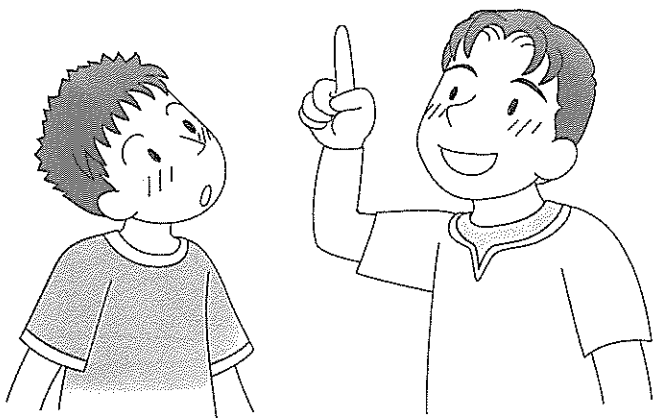
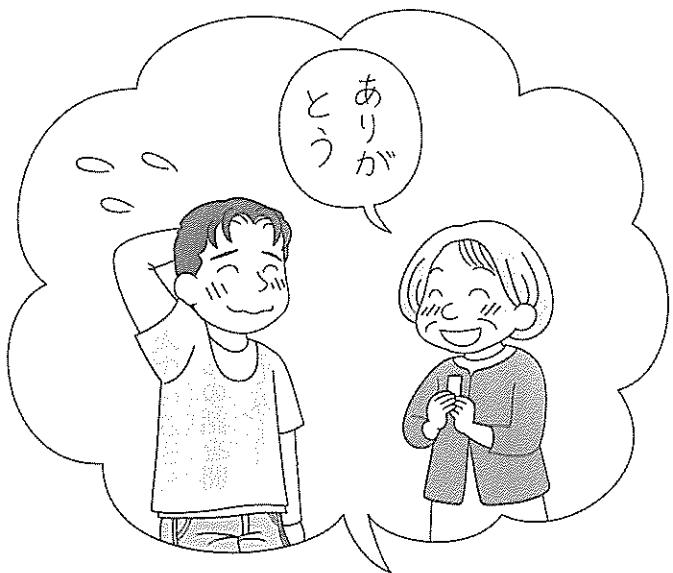
「僕も前は、自分がわざわざ席を立って声をかけなくても、ほかの誰かが譲るだろう」と思っていたんだけどね。兄さんと一緒にバスや電車に乗ると、兄さんが結構、当たり前のように席を譲るんだ。

それで、小学校高学年くらいのころに聞いてみたら、兄さんも初めからできていたわけじゃなかったみたい。むしろ困っている人を見かけても、恥ずかしくて声をかけられないことのほうが多くて、そのたびに自分がいやになった」と

言うんだけど……」

そんな優介さんのお兄さんを変えたのは、一つの出会いだったようです。あるとき、駅の券売機の前で困っていたお年寄りに思い切って声をかけ、手助けをしたところ、無事に切符を手にした相手から「ありがとう、助かったわ」とお礼を言われたというのです。

「兄さんにとっては、そのひと言が大きかったみたい。積極的に声をかけるようになったのは、それからなんだって」



初めの一步

優介さんは、そんなお兄さんの話を聞いて、「自分も一步を踏み出してみよう」と思うようになったといいます。

そのとき光太郎さんは、ずっと自分の心に引つかかっていたことを、優介さんに尋ねてみました。

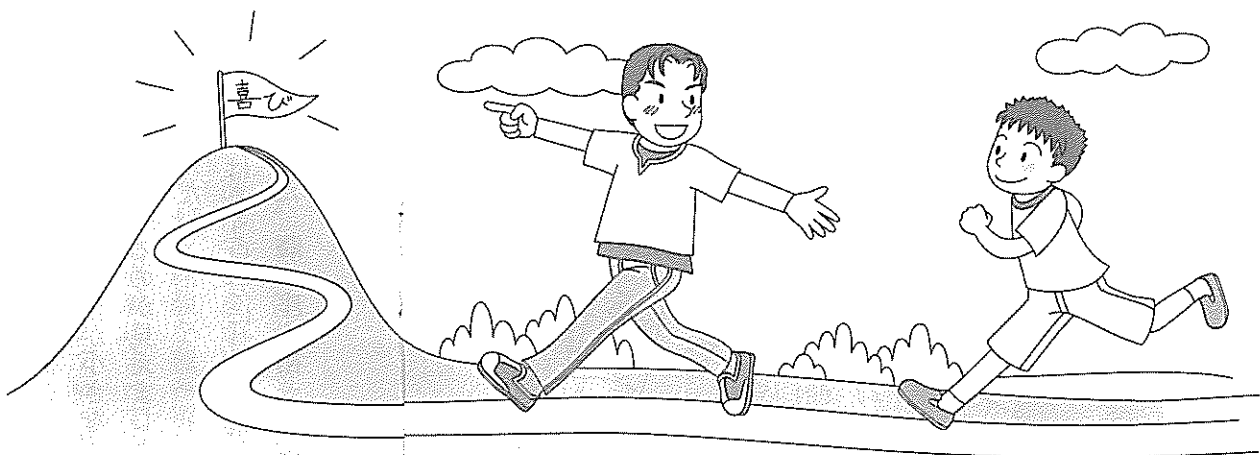
「でも、断られたら気まずいし……相手に怒られたりしたら、次からは、やる気が起こらなくなったりしない？」

「僕の場合は、一人じゃなかったから」
優介さんは当初、お兄さんと一緒にい

るときに実践してみたそうです。すると断られたときも、一部始終を見ていたお兄さんが、優介さんが勇気を出して声をかけたことを褒めてくれたり、「次は大丈夫」と言って励ましてくれたりしたとい

います。
「初めのうちは、兄さんが一緒だから」と思うことで、緊張や気恥ずかしさをまぎらわしていた気がする。でも、やっぱり相手に喜んでもらえたら、自分も温かい気持ちになるし……。何度もそういうことを繰り返すうちに、一人でいるときも声をかけることができるようになったんだ」

光太郎さんは優介さんの話を聞きながら、こんなことを考えていました。



確かに、誰かと一緒のときなら……
これまでは困つていそうな人を見かけても「手助けを申し出ても、断られるかもしれない」という不安や「自分がやらなくても、ほかの誰かがやるだろう」と人任せにする気持ちが勝つて、何もできないことが多かった光太郎さん。実は光太郎さんも、そんな自分自身を変えたいと思っていたのです。

義務感から喜びへ



次の週末は、サッカー部の試合がありました。

帰りの電車の中で、光太郎さんは近所に住む祐一さん（19歳）と並んで座席に座り、その日の試合について語り合っていました。そのとき、向かい側のドアから、赤ちゃんを抱いた女性が小さな子供の手を引いて乗車するのが見えました。

「今がチャンスだ」

光太郎さんはそう自分に言い聞かせ、立ち上がりました。隣に座る祐一さんも

光太郎さんのやろうとしていることが分かったようで、一緒に席を立ちます。

「あの……よかつたら座ってください」

「いいんですか？ ありがとうございます。助かります」

女性は笑顔でお礼を言うと、子供にも「ありがとう」を促し、二人が譲った席に親子で座ります。光太郎さんが「声をかけてよかつたな」と考えていると、並んで立つ祐一さんがこう言いました。

「ナイスフォロー。光太郎のおかげで、自分も自然に動けたよ」

*

この出来事をきっかけに、光太郎さんは優介さんや祐一さんなどの親しい仲間

と一緒にいるとき、手助けが必要そうな人に出会うと、進んで声をかけるようになります。そうした経験を積み重ねるうちに、かつての苦い経験によって抱いていた不安は、少しずつ消えていったようです。やがて一人で電車に乗っているときも、自然とお年寄りに席を譲ることができるようになったのです。

また、光太郎さんは自分のもう一つの変化に気づきました。困っている人を見かけたとき、以前は「手助けをしなければ」という義務感だけが先に立って、緊張のあまり、足がすくんでしまうことも多かった気がします。しかし、今では相手に喜んでもらえたときのうれしさが、不安や緊張に勝るようになったのです。

「思いやりの心」を行為に表す

私たちは、心の中に芽生えた「他の人を思いやる気持ち」を、そのまま実際の行動に移せないことがあります。そこには気恥ずかしさや、拒絶されることへの不安、人任せにする気持ちなど、さまざまな理由があるでしょう。

「思いやり」を行動に移すためには、ひと言でいえば勇気が必要です。ところが「分かつてはいるけれど、なかなか行動に移せない」という悩みを持つ人も少なくないでしょう。勇気を実行に移すまで

の間には、少しステップが必要なのかもしれません。

「電車の中で座席を譲る」という例では、光太郎さんや優介さんのように、まずは「自分の善意と実践を見守ってくれる身近な人」が一緒のときに試みることも、一つのステップといえそうです。こうして小さな実行を積み重ねると、心のハードルは徐々に低くなり、いつしか一人でも、その場に応じたふるまいが自然とできるようになるのではないのでしょうか。

「緊急時の人助け」にも、もちろん勇気は必要です。一人では尻込みしてしまいそうな場面でも、周囲の人の理解や協力があれば、実行へのハードルは低くなるものです。また、緊急時であればなおのこと、安全の確保や、独りよがりの行動で混乱を招かないためにも、周囲との協力は不可欠でしょう。

その他のボランティア等でも、「関心はあるもののなかなか一歩を踏み出せない」という場合は、まずは周囲に経験者がいないか探したり、同じような思いを抱いている友人を誘ってみたりすることで、参加しやすくなるのではないのでしょうか。そうして善意の輪が広がっていくことは、私たちを取りまく社会がよりよ

くなっていくことにもつながります。勇気ある思いやりの実行は、その行為の結果を受け取る相手だけでなく、行った本人にも大きな喜びをもたらしてくれます。その喜びが、私たちをさらなる実行へと向かわせるのです。

